史学会　近世史シンポジウム「幕末維新外交研究の成果と課題」

報告「日独関係史（外交史）研究の現在と課題」

2020 年 11 月 8 日（オンライン）

福岡万里子（国立歴史民俗博物館）

【報告の目的】

幕末維新期におけるドイツ語圏諸国と日本の関係（「日独関係史」）に関する研究史と現在の状況を、各分野の研究課題と共に概観する。それに当たってはまず、戦前から現在にかけての在独日本関係史料の調査収集の系譜を整理した上で、研究史を可能な限り見渡したい。その上で、当該テーマを取り上げる意味・可能性、そして今後の課題を改めて考える。

【構成】

１．在独日本関係史料の調査収集の系譜（戦前～現在）

２．研究史、各分野の研究課題（オイレンブルク使節団、駐日代表ブラント、ハンザ諸都市、シーボルト他）

３．まとめ－幕末維新期日独関係史研究の可能性と今後の課題

１．在独日本関係史料の調査収集の系譜（戦前～現在）

①1930 年代、藤井甚太郎・今宮新による調査収集@ベルリン・プロイセン枢密文書館

藤井甚太郎（文部省維新史料編纂官）

→”Diplomatische Dokumenten betreffend Japan 1859-1861 bearbeitet von Jintaro Fujii”

（ロートグラフ本二分冊、44 通の文書）（東京大学史料編纂所蔵）

今宮新（のち慶應義塾大学教授）

→”Diplomatische Dokumenten betreffend Japan, 1843-1875, bearbeitet von Professor Shin IMAMIYA im PREUSSISCHEN GEHEIMES-ARCHIV zu Dahlem, Berlin in 1932“

（今宮新氏採訪日独外交関係文書：今宮による史料筆写ノート 14 冊、ロッヒャー女史による史料のタイプ打ち翻刻文書、若干のロートグラフ本、写真）（東京大学史料編纂所蔵）

･･･いずれも調査収集対象は主に、幕末維新期の日独関係に関するプロイセン外務省文書。なかでも 1860～61 年のオイレンブルク使節団に関する史料が多い。そのうち重要なものについては、抜粋して『大日本古文書　幕末外国関係文書』に収録。

※第二次世界大戦、連合国による占領、東西ドイツ分裂→史料の分散・離散

－戦禍を避けてのベルリンからの史料の「疎開」

－英米仏ソ占領軍による史料の接収

－東独・西独下の複数文書館への史料の返還・収蔵（ソ連にとどまった史料群もあるらしい）

②1960 年代、東京大学史料編纂所の収集事業@東西ドイツの各文書館

・日本学士院の主宰による東京大学史料編纂所の海外史料マイクロフィルム収集事業

・藤井・今宮両教授採訪の初期日独関係史料については、その行方を辿る

→『東京大学史料編纂所　日本関係海外史料目録　11』中、ドイツ民主主義共和国（東ドイツ）

所在文書、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）所在文書

東ドイツ
◎ポツダム市及びメルゼブルク市所在ドイツ中央文書館（Deutsches Zentralarchiv）
西ドイツ
◎コブレンツ市所在連邦文書館（Bundesarchiv, Koblenz）
◎ハンブルク市所在国立自由都市ハンブルク参事会文書館
（Staatsarchiv des Senats der Freien und Hansestadt Hamburg）
◎ブレーメン市所在国立ブレーメン文書館（Staatsarchiv Bremen）

＞＞＞

- 幕末維新期を中心に 1840～1880 年代の日独関係史料を調査収集。簿冊中の文書毎の詳細な史料目録を作成・公表（『東京大学史料編纂所　日本関係海外史料目録　11』所収）
- 東独中央文書館、西独コブレンツ連邦文書館で収集されたのは主に、元来プロイセン枢密文書館に所蔵されていた初期日独関係史料（プロイセン外務省文書が主体、一部プロイセン商務省文書）
- ハンブルク、ブレーメン収集の史料はやはり初期日独関係（幕末維新期）のもの

※東西ドイツ統一 ⇒再び史料の大移動／里帰り

③1999～2001 年、東京大学史料編纂所の調査研究事業@ベルリン・プロイセン枢密文書館

・科研費補助金基盤研究（B）「19 世紀列強の陸・海軍文書を中心とした在外日本関係史料の調査研究」（研究代表：保谷徹氏）
・藤井・今井両教授による戦前の調査後、70 年ぶりのプロイセン枢密文書館での対日関係史料調査
・「これまでポツダムやメルゼブルクに分割所蔵されていた文書群が、統一ドイツ成立後にどのような形で所蔵されているか、その全体像を把握するとともに、史料編纂所が所蔵するマイクロフィルムがどの範囲のものであるか、原史料と照合して確認することに目標をおいた」（同科研報告書、p.26）
・プロイセン外務省文書中の日本関係史料の全点を閲覧、旧架蔵番号と比較・点検、史料編纂所が所蔵するマイクロフィルムに収められているものがどの部分にあたるかを調査

④2013～2016 年、五百旗頭科研の在独日本関係文書収集

・科研費補助金基盤研究（B）「ドイツにおける対日外交文書の収集と利用可能性」（研究代表：五百旗頭薫氏）
・ドイツ国内の主要な公文書館の対日外交関係文書の調査・収集（対象時期：幕末から 1910 年代まで）
◎調査・収集を実施した公文書館：

- ベルリン・プロイセン枢密文書館（Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz）

- ドイツ連邦文書館ベルリン・リヒターフェルデ館（Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde）
- ドイツ外務省政治文書館（Politisches Archiv des Auswärtigen Amts）
- ドイツ連邦文書館フライブルク軍事文書館（Bundesarchiv-Militärarchiv zu Freiburg）
- ハンブルク国立文書館（Staatsarchiv Hamburg）

･･･プロイセン王国期、北ドイツ連邦期、ドイツ帝国期にまたがる文書群。
（外務省文書、帝国宰相府文書、司法省文書、海軍省文書など）

- 史料収集対象時期の拡大（幕末維新期主体から幕末・明治期全体へ）
- 史料収集対象文書の拡大（外務省文書主体から各官庁文書の日本関係文書の網羅的収集）
- 史料複写媒体はマイクロフィルムからデジタル画像データへ
- 簿冊毎の史料目録（研究分担者市川智生氏の作成）
- 東大史料編纂所での公開を準備中

【参考】国立歴史民俗博物館編『歴史系総合誌　歴博』209 号「特集　ドイツ日本関係史料の可能性」（国立歴史民俗博物館、2018 年）
・五百旗頭科研プロジェクト及び収集史料を使った研究の一端を紹介
・歴博によるシーボルト父子関係史料の調査収集・データベース作成事業についても紹介[1]

2．研究史、各分野の研究課題

①オイレンブルク使節団（プロイセン東アジア遠征）の日本訪問・条約交渉

ドイツ語圏の主な研究　[Siemers 1937][Kerst 1962][Stahnke 1987][Martin 2002]
日本語圏の主な研究　[丸山 1931][丸山 1940][今宮 1971][中井 1968, 1969]
[鈴木楠緒子 2012][福岡 2013]

- Stahncke, Holmer, Die diplomatische Beziehungen zwischen Deutschland und Japan: 1854-1868. Stuttgart：Franz Steiner Verlag Wiesbaden, 1987
- プロイセン側史料（上記東大史料編纂所マイクロフィルムのドイツ中央文書館史料）とハンブルク市政府文書に基づき、特にハンザ諸都市のプロイセン東アジア遠征への関わりを明らかにする。
- 使節団が幕府と行った条約交渉については、ドイツ語圏の研究として初めて日本側の一部の刊行翻訳史料と二次文献を参照して叙述している。ただ日独交渉の経過にもっぱら注目したため、幕府がプロイセンと条約締結した意図が不分明なままにとどまる

[1] オンライン公開記事：
https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/209/witness.html

- 福岡万里子『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』東京大学出版会、2013 年
- 基軸史料：プロイセン側史料[2]、ハンザ史料[3]、日本側外交史料＋英米蘭の関係史料
- 日独交渉と並行して同時期の日英・日米交渉を参照し、プロイセン／ドイツ諸国との条約問題が、新規条約締結を当面凍結するという幕府の外交方針を確立させる触媒になっていたことを解明（日独交渉を幕末外交史の文脈に位置づけ）
- ドイツ諸国の対日条約参加問題、「非条約締結国民」の居留問題
  ･･･幕府の排外的態度＜＜＞＞中国・シャムの寛容姿勢（通商国の増加、無条約国）
  ⇒五ヶ国条約締結後の幕府外交方針≒旧来型「鎖国之法」の改訂版

【研究課題】
・学術遠征としてのプロイセン東アジア遠征 cf. [大井 2016]
・中国・シャムでのオイレンブルク使節団 cf. [鈴木楠緒子 2012] [福岡 2016]

<u>②初代駐日代表マックス・フォン・ブラントの対日外交</u>
◎通史的基礎研究：[Stahnke 1987] [Wippich 1995][4]
東独時代のドイツ中央文書館史料（～1867 年までのブラントの本省宛て報告）及びブラントの回想録[5]を基本史料とする。Wippich はほか、1870 年以降のブラント本省宛て報告（ドイツ外務省政治史料館所蔵）を使い明治初期のブラント対日外交をカバー。

◎各時期の研究
- プロイセン「領事」期間（1863～66）[Stahnke 1987] [Wippich 1995]
- 列強の駐日外交団からも幕府からも疎外。主要な外交問題をめぐる折衝で蚊帳の外に
- 本国からは諸外国との協調（独自路線の封印）を指示
- 反幕感情、幕府に対するタカ派的政策を主張（開港延期問題、生麦事件等）
- 北ドイツ連邦「代理公使」兼「総領事」期間（1867～）
- 倒幕藩（特に薩摩）への接近願望 [Stahnke 1987] [Wippich 1995]
- 蝦夷地植民地化計画／戊辰戦争期に会津・庄内藩と蝦夷地所領につき秘密交渉 [Wippich 1997] [バウマン 2011][箱石 2013] [福岡 2018]
- 戊辰戦争期に新潟開港問題・局外中立問題等につき英パークスと対立、奥羽越列藩同盟寄りの立場・新政府側への疑心 [石井孝 1966][箱石 2004-06] [福岡 2018]

【研究課題】
- [Stahnke 1987] [Wippich 1995]の通史的研究は日本の幕末維新史研究とほぼ没交渉。日

---

[2] 上記「今宮新氏採訪日独外交関係文書」及びプロイセン枢密文書館所蔵の原史料。
[3] 国立ハンブルク文書館所蔵日本関係史料の翻刻集 [Mathias-Pauer und Pauer 1992]。
[4] 他にブラントの駐日期間全体の活動を概観したものとして、[Schwalbe u. Seemann 1974]、[檜山 2005]がある。
[5] Max von Brandt, Dreiunddreissig Jahre in Ost-Asien. Erinnerungen eines deutschen Diplomaten. Bd.1 u. 2. Leipzig：Georg Wigand 1901.（日本関係部分の邦訳：原潔・永岡敦訳『ドイツ公使の見た明治維新』新人物往来社、1987 年）

本側史料は基本的に考察範囲外

- 戊辰戦争期のブラントの活動は未だ不明なところが多い。ブラントの対日姿勢の変遷も謎が多い

※1868～69 年のブラント本省宛て報告･･･近年まで所在不明
＞＞ドイツ連邦文書館ベルリン・リヒターフェルデ館で見出される（五百旗頭科研）
cf. [福岡 2018]

<u>③ハンザ諸都市と日本の関係</u>

◎通史的基礎研究：[Stahnke 1987][Stahnke 1988]
国立ハンブルク文書館、国立ブレーメン文書館、東独時代のドイツ中央文書館（東大史料編纂所マイクロフィルム）、オランダ国立公文書館の関係史料を参照し、1855 年～67 年にかけてのハンザ諸都市の対日条約締結へ向けた試みの経過を追跡。

◎各時期の研究

- 対日条約が必要になった背景･･･19 世紀半ば以降ハンザ諸都市の東アジア貿易が活発化
  [Baasch 1897][Wätjen 1936][Wätjen 1942/43][Glade 1966][Eberstein 1988][福岡 2013][Fukuoka 2019]
- プロイセン東アジア遠征に条約締結を委託するも失敗
  [Stahnke 1987][Stahnke 1988][福岡 2013]
- 竹内遣欧使節団に接触して働きかけるも失敗。オランダに仲介を依頼し、総領事ポルスブルックが交渉を引き受けるも、交渉停滞。1867 年、交渉成功を目前にして、北ドイツ連邦の成立を受けブラントが日本・プロイセン条約を北ドイツ連邦諸国に拡大成功
  [Wätjen 1936][Mathias-Pauer 1983][Stahnke 1987][Stahnke 1988][福岡 2015]

※国立ハンブルク文書館所蔵の関係史料集成 [Mathias-Pauer und Pauer 1992]
※この間のブレーメン、及びブレーメン商人ギルデマイスターの動向
[Kerst 1965][Stahnke 1988][生熊 1991]

- ハンザ系商会の日本での貿易活動
- クニフラー商会（のちイリス商会）の事例

：バタヴィア、上海、香港、リヨン、マルセイユ、サンフランシスコ等～長崎・横浜・箱館
[Bähr, Lescenski, Schmidtpott 2009]

【研究課題】

- ハンザの条約締結問題はイタリア（仏の仲介）、デンマーク（蘭の仲介）などとも絡み、新規条約締結問題の最幕末における顛末の一環として位置づけるべきか
  Cf. [鈴木祥 2012, 2013]
- 駐日代表はプロイセン領事ブラント、実際のドイツ系居留民の多くはハンザ商人というねじれ

- ハンザ商人は日本開港地で「プロイセン人」になったのか、それとも「オランダ人」「イギリス人」等であり続けたのか。
- その中での領事裁判権運用の実態は？
  Cf. 中国・上海での事例 [鈴木楠緒子 2012]
  明治初年、諸外国の商人領事における領事裁判権問題 [鈴木祥 2018]
- 非条約締結国民の居留に対する幕府・英国双方の問題視
  Cf. [Stahnke 1987] [Wippich 1995][福岡 2013]

● ハンザ系商人の日本での貿易活動の実態は大部分が不明

④幕末期のシーボルトと日本[6]

◎通史的基礎研究：[呉 1896] [Körner 1967]

● 呉秀三『シーボルト先生－其生涯及功業』吐鳳堂書店、1896 年

浩瀚なシーボルト伝記。シーボルトの幕末史への関わりについても、東大シーボルト文書（現東大史料編纂所所蔵外務省引継書類中のシーボルト関係文書）とオランダ東インド政庁文書を基礎史料として叙述[7]。依拠した基礎史料の翻刻を史料編に多数収載。

Cf. [コイペル 1924] [板沢 1960]

● Körner, Hans, Die Würzburger Siebold. Leipzig, 1967.

ヴュルツブルクのシーボルト家の 4 世代にわたる人々の伝記的研究。P. F. v. シーボルトと日本開国史の関わりについては、呉秀三本収載のオランダ語史料のほか、呉本では参照されなかった欧州の刊行史料や、ミッテルビベラッハ城所蔵[8]やオランダ国立公文書館所蔵の未刊行のシーボルト関係史料も部分的に参照している。

◎各時期の研究（[呉 1896] [Körner 1967]以外）

- オランダ国王開国勧告（1844 年）への関与 [Chijs 1867] [永積 1986] cf. [松方 2007]
- 米国艦隊来航前夜のオランダの対日政策への関与[Chijs 1867][9]
- 米国艦隊来航に前後するロシアの対日政策への関与 [保田 1997] [Franz 2005]
- 米国艦隊にまつわるシーボルトの動向 [宮坂 1997]
- 再来日時（1859～1862 年）の活動 [MacLean 1978] [保田 1995] [沓澤 1997]
- 再度帰欧後の活動

遣仏使節に際する周旋ほか [?]

第 2 次日本コレクション・日本博物館関係 [バイライス 1994] [石山 1997]

[国立歴史民俗博物館 2016, 2018]（史料集）

---

[6] シーボルトの全体像に関する近年の研究動向・資料状況については[沓澤 2003][松井 2016]も参照。

[7] 他に、コイペル「欧州に於けるシーボルト先生の事蹟」という文献（詳細未詳。オランダ東インド政庁文書に基づく研究のよう）も重要な典拠となっている。[コイペル 1924]の著者の業績であろうか？

[8] 当時。現在はブランデンシュタイン城所蔵

[9] Cf. 幕末日蘭関係史研究者 Herman Moeshart 氏による未刊行研究あり。国際シーボルトコレクション会議 2016 in Nagasaki では、Jim Bernard" A New Look at the Opening of Japan to Trade and Diplomatic Relations"で、オランダのヘンドリック王子とシーボルト間にやり取りされた書翰（ブランデンシュタイン城所蔵）に基づく研究成果が発表された。管見の限り未公刊。

【研究課題】

- 日本開国史の通史的研究（[石井孝 1972][三谷 2003]ほか）では、シーボルトの関与はほとんど言及されない
- ブランデンシュタイン家シーボルトアーカイヴ、オランダ国立公文書館所蔵の関係史料の開拓の余地大（オランダ語、ドイツ語、フランス語、日本語の手稿史料）
  史料目録 [長崎市教育委員会・シーボルト記念館 2001]
  ※国立歴史民俗博物館シーボルト父子関係史料データベースで史料目録の検索可能[10]。

⑤その他

- 幕末日本・スイス関係史 [中井 1971]

<u>スイス系商社シーベル・ブレンワルト（SB）商会</u>

- カスパー・ブレンワルト（スイス遣日使節団員、後スイス総領事・SB 商会経営者）の幕末日記の翻訳刊行 [横浜市ふるさと歴史財団・ブレンワルド日記研究会 2020]
- 幕末日記のエッセンスを紹介 [横浜開港資料館 2015]
- SB 商会の幕末維新期の貿易活動（生糸貿易、戊辰期の密貿易、前橋藩製糸業への関与）[Fukuoka and Schwarzenbach, forthcoming]

<u>ルードルフ・リンダウ</u>

リンダウの膨大な書翰の翻刻史料集成 [Hillenbrand 2007]

- オーストリアの遣日使節

アレクサンダー＆ハインリッヒ・フォン・シーボルトの日墺条約交渉への関与 [Brandenstein und Adelmann 2020]
オーストリア遣日使節の日記翻刻の刊行 [Pantzer 2019]

- 幕末維新期日本居留のドイツ系人物

和親条約期の下田に来航・居留したドイツ商人リュードルフ [中村訳 1984][Stahnke 1988]
新潟居留ドイツ商人ウェーバー、新潟駐在ドイツ領事ライスナー [青柳 2014][青柳 2019]
箱館居留プロイセン商人・プロイセン副領事ガルトネル兄弟 [田辺 2010]
シュネル兄弟（戊辰期に新潟で密貿易、奥羽越列藩同盟に助力） [Stahnke 1986] [福岡 2013]

３．まとめ－幕末維新期日独関係史研究の可能性と今後の課題

- 幕末維新期の外交史研究で日独関係史を取り上げる意味・可能性
- 国民国家形成前夜のドイツが東アジアの外交通商世界に参入
  ⇒<u>近世近代転換期独特の現象を浮かび上がらせる</u>
  （数十ヵ国の条約参加問題、非条約締結国民の居留問題、国籍「詐称」問題･･･）

[10] https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/pfvs/db_param

- 無条約状態で東アジア開港地に参入したハンザ系商人。中国では中独条約の保護下に回収、日本では日本・プロイセン条約に公的には回収され得ず
- オランダ、ロシアに助言して日本開国過程への参与を図ったシーボルト。再来日では、幕府から「オランダ人」と見られ、オランダからは疎外
- スイスの対日外交に関与し、初代駐日スイス（総）領事をオランダから引き継ぐ形で務めたプロイセン人リンダウ。のち新任のスイス総領事ブレンワルトと対立

･･･「国籍」を超える個人の行動と、条約締結・法整備・対東アジア外交体制の形成整備により国家が個人を囲い込み、あるいは疎外していく流れのせめぎ合い

➢ 駐日プロイセン領事ブラント：虚弱な情報収集体制、本国のバックアップ体制の下で対日外交をせざるを得ない。入手し得る情報や人的コネクションの圧倒的な対英格差（※）

⇒限られた情報で形成される日本理解。日本理解をめぐる諸外国代表間の分裂
（幕府と排外派の関係、幕府・朝廷・諸藩の関係をどうみるか等）
･･･対日外交態度・方針へ影響

※東アジアのイギリスの特殊性
・充実した公使館・領事館スタッフ、専門通訳養成による高度な情報収集体制、東アジアに張り巡らされた外交・通商・「公共財」のネットワーク、東アジア艦隊の常駐･･･

➢ 1866 年恐慌以後における巨大商社の対日貿易後退と中小商社の進出 [石井寛治 1984]
（＜＜銀行網・汽船網・電信網の日本拡大）
・維新期～明治前期スイス系貿易商社の生糸貿易シェア躍進 [斎藤 1988][西川 1997]
・1867 年貿易統計における「プロイセン」船入出港数の増加 [横浜市 1959]
Cf. 中国沿海部では 1860 年代にドイツ系諸国船の入港数が躍進
[Baasch 1897] [Wätjen 1942] [Eberstein 1988] [福岡 2013] [Fukuoka 2019]

● 今後の課題
・活用し得る史料群に比して研究者が圧倒的に少ない
・史料群を活用できる人材の呼び込み ー「日本史」「ドイツ史」を越えたアプローチが必要
・史料翻刻、史料利用状況整備の重要性

【参考文献】

Baasch, Ernst, Die Anfänge des modernen Verkehrs Hamburgs mit Vorderindien und Ostasien. In: Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft in Hamburg, Bd.XIII, 1897.

Bähr, Johannes; Lescenski, Jörg; Schmidtpott, Katja, Handel ist Wandel: 150 Jahre C. Illies & Co. München; Zürich: 2009.

Brandenstein-Zeppelin, Constantin von, und Adelmann, Wilhelm Graf, Die Bedeutung von Alexander und Heinrich von Siebold für den Freundschaftsvertrag von 1869. Hrsg. von Hidaka, Kaori und Zorn, Bettina, Japan zur Meiji-Zeit: Die Sammlung von Heinrich von Siebold. Wien: Weltmuseum Wien, 2020.

Chijs, J. A. van der, Neerlands Streven tot Openstelling van Japan voor den Wereldhandel. Amsterdam: Frederik Muller, 1867.（小暮実徳訳『シェイス　オランダ日本開国論』雄松堂出版、2004 年）

Eberstein, Bernd, Hamburg-China: Geschichte einer Partnerschaft. Hamburg: Christans, 1988.

Fukuoka, Mariko, German Merchants in the Indian Ocean World: From Early Modern Paralysis to Modern Animation. In: Angela Schottenhammer (ed.), *Early Global Interconnectivity across the Indian Ocean World*. Vol.I: Commercial Structures and Exchanges, pp.259-292. Palgrave Mcmillan, 2019.

Fukuoka, Mariko and Schwarzenbach, Alexis, Between Trade and Diplomacy: The Commercial Activities of the Swiss Silk Merchants Siber & Brennwald in late Edo and early Mejij Japan. In: Robert Fletcher and Robert Hellyer (eds.), *Documenting Westerners in Nineteenth-Century China and Japan.* London: Bloomsbury, forthcoming.

Franz, Edgar, *Philipp Franz von Siebold and Russian Policy and Action on Opening Japan to the West in the Middle of the Nineteenth Century.* München: Iudicium 2005

Glade, Dieter, Bremen und der Ferne Osten. Hrsg. von K. H. Schwebel, Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der Freien Hansestadt Bremen, Bd.34. Bremen: Carl Schünemann Verlag 1966.

Hillenbrand, Rainer (Hrsg.), Die Politische und Literalische Korrespondenz Rudolf Lindaus. Vol.1-2. Frankfurt: Peter Lang 2007.

Kerst,Georg, Die deutsche Expedition nach Japan und ihre Auswirkungen. Hamburg: De Gruyter, 1962

Kerst, Georg, Die Bedeutung Bremens für die frühen deutschjapanischen Beziehungen. In: Bremisches Jahrbuch, Bd.50, 1965.

Körner, Hans, Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts. Leipzig: Johann Ambrosius Barth, 1967.

MacLean, J. Philipp Franz von Siebold and the Opening of Japan 1843 – 1866. In: *Philipp Franz von Siebold: A Contribution to the Study of the Historical Relations between Japan and the Netherlands.* Leiden: The Netherlands Association for Japanese Studies 1978.（マックリーン「シーボルトと日本の開国 一八四三ー一八六六」横山伊徳編『幕末維新と外交』所収、吉川弘文館、2001 年）

Martin,Bernd, „Die preußische Ostasien-Expedition und der Vertrag über Freundschaft, Handel und Schiffahrt mit Japan (24. Januar 1861)“. In: Krebs, Gerhard (Hg.): Japan und Preußen. München: Indicuum, 2002.

Mathias-Pauer, Regine, Die Hansesädte und Japan am Vorabend der Meiji-Restauration. Park, Sung-Jo und Krepien, Rainer, Referate des V. Deutschen Japanologentages vom 8. bis 9. April 1981 in Berlin. Bochum: Studienverlag Dr. N. Brockmeyer 1983.

Mathias-Pauer, Regine, und Pauer, Erich (Hg.), Die Hansestädte und Japan, 1855-1867, Ausgewählte Dokumente. Marburg: Förderverein Marburger Japan-Reihe 1992.

Schwalbe, Hans u. Seemann, Heinrich (Hrsg.), Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973. Tokyo: OAG 1974.

Siemers, Bruno, Japans Eingliederung in den Welthandelsverkehr. 1855-1869. Berlin: Ebering, 1937

Stahnke, Holmer, Die Brüder Schnell und der Bürgerkrieg in Nordjapan. Tokyo: OAG aktuel Nr.27, 1986.

Stahncke, Holmer, Die diplomatische Beziehungen zwischen Deutschland und Japan: 1854-1868. Stuttgart : Franz Steiner Verlag Wiesbaden, 1987

Stahnke, Holmer, Die Bemühnungen der Hansestädte um einen Handelsvertrag mit Japan 1854 – 1867/ ホルマー・シュターンケ「幕末におけるハンザ同盟都市の日本との通商航海条約締結の努力について」『東京大学教養学部　教養学科紀要』第 20 号、1988 年

Stahnke, Holmer, Friedrich August Lühdorfs Handelsexpedition nach Japan. Tokyo: OAG aktuel Nr.39, 1988.

The American Historical Association, Committee for the Study of War Documents, A Catalogue of Files and Microfilms of the German Foreign Ministry Archives 1867-1920. Oxford University Press 1957.

Panzer, Peter (Hrsg.), Österreichs erster Handelsdelegierter in Japan: Das Japan-Tagebuch von Karl Ritter von Scherzer 1869. München: Iudicium 2019.

Wätjen, Hermann, „Die Anfänge des deutsch-japanischen Handelsverkehrs im neunzehnten Jahrhundert“. In: Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte, XXXV , 1936.

Wätjen, Hermann, „Die deutsche Handelsschiffahrt in chinesischen Gewässern um die Mitte des 19.Jahrhunderts“. In: Hansische Geschichtsblätter, Jg.67/68, 1942/43.

Wippich, Rolf-Harald, „Strich mit Mütze“: Max von Brandt und Japan – Diplomat, Publizist, Propagandist. Tokyo: OAG aktuel Nr.65, 1995.
Wippich, Rolf-Harald, Japan als Kolonie? Max von Brandts Hokkaido-Projekt 1865/1867. Hamburg: Abera Verlag, 1997.
青柳正俊（訳・編）『新潟居留ドイツ商人　ウェーバーの生涯』考古道書店、2014 年
青柳正俊『川港の岸辺で - 新潟ドイツ領事ライスナーの足跡』私家版、2019 年
石井寛治『近代日本とイギリス資本－ジャーディン＝マセソン商会を中心に』東京大学出版会、1984 年
石井孝「内乱の過程における外交問題」同著『増訂　明治維新の国際的環境』所収、吉川弘文館、1966 年
石井孝『日本開国史』吉川弘文館、1972 年
石山禎一編著『シーボルトの日本研究』吉川弘文館、1997 年
今宮新『初期日独通交史の研究』鹿島研究所出版会、1971 年
大井知範『世界とつながるハプスブルク帝国－海軍・科学・植民地主義の連動』彩流社、2016 年
板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、1960 年
生熊文編訳『ギルデマイスターの手紙－ドイツ商人と幕末の日本』有隣堂、1991 年
今宮新『初期日独通交史の研究』鹿島研究所出版会、1971 年
金井圓『対外交渉史の研究－開国期の東西文化交流』有隣堂、1988 年
沓澤宣賢「第二次来日時におけるシーボルトの外交活動」箭内健次・宮崎道夫編『シーボルトと日本の開国 近代化』所収、続群書類従完成会、1997 年
沓澤宣賢「シーボルト研究史概観－最新の研究動向を中心に」（石山禎一・沓澤宣賢・宮坂正英・向井晃『新・シーボルト研究　Ⅱ 社会・文化・芸術編』所収、八坂書房、2003 年
呉秀三『シーボルト先生－其生涯及功業』吐鳳堂書店、1896 年
コイペル「欧州に於けるシーボルト先生」シーボルト先生渡来百年記念会編『シーボルト先生渡来百年記念論文集』シーボルト先生渡来百年記念会、1924 年
国立歴史民俗博物館編（櫻庭美咲責任編集）『五大陸博物館所蔵シーボルトコレクション関係史料集成』国立歴史民俗博物館、2016 年
国立歴史民俗博物館編（福岡万里子責任編集）『シーボルト日本博物館の概要と解説－欧文原本・翻刻・翻訳』国立歴史民俗博物館、2018 年
斎藤多喜夫「外商側からみた明治前期の横浜貿易」『横浜開港資料館紀要』第 6 号、1988 年
鈴木祥「幕末期の幕府・ハワイ条約交渉」『日本歴史』773 号、2012 年
鈴木祥「明治初年の新規通商条約と条約改正問題」『中央大学大学院研究年報』43 号、2013 年
鈴木祥「明治期日本における領事裁判と商人領事」『外交史料館報』第 31 号、2018 年
鈴木楠緒子『ドイツ帝国の成立と東アジア－遅れてきたプロイセンによる「開国」』ミネルヴァ書房、2012 年
田辺安一『ブナの林が語り伝えること－プロシア人 R・ガルトネル七重村開墾顛末記』北海道出版企画センター、2010 年
東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所　日本関係海外史料目録　11』東京大学、1968 年
中井晶夫「プロイセン艦隊の東アジア遠征」『上智史学』13 号、1968 年
中井晶夫「解説」『オイレンブルク　日本遠征記（下）』所収、pp.357-394、雄松堂出版、1969 年
中井晶夫『初期日本＝スイス関係史』風間書房、1971 年
中村赳訳・小西四郎校訂『グレタ号　日本通商記』雄松堂出版、1984 年
長崎市教育委員会・シーボルト記念館編『フォン・ブランデンシュタイン城　シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』第 1・2 巻、長崎市教育委員会、2001 年
永積洋子「通商の国から通信の国へ－オランダの開国勧告の意義」『日本歴史』458 号、1986 年
西川武臣『幕末明治の国際市場と日本―生糸貿易と横浜』雄山閣、1997 年
バイライス、ウド（宮坂正英訳）「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト　第二の日本コレクション」『鳴滝紀要』第 4 号、1994 年
バウマン、アンドレアス「日本国土が狙われる（第 1 部）　駐日領事ブラントの蝦夷地（北海道）植民地化の概略とそれにかかわったゲルトナー兄弟の出自」『国際関係研究』（日本大学）第 32 巻 1 号、2011 年
箱石大「戊辰戦争期の風刺画にみる駐日プロイセン代理公使フォン・ブラント」（1）-（10）『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第 25 – 34 号、2004-2006 年
箱石大「戊辰戦争に関する新たな史料の発見」同編『戊辰戦争の史料学』所収、勉誠出版、2013 年
檜山正子「マックス・フォン＝ブラント－お雇いドイツ人教師招聘の立役者だった初代プロシア公使」Brückenbauer: Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches. Berlin: Japanisch-Deutsches Zentrum/ München: Iudicium 2005.
福岡万里子『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』東京大学出版会、2013 年
福岡万里子「戊辰戦争に関与したシュネル兄弟の「国籍」問題－ヴィルト・カワラ氏収集オランダ所在史料から」箱石大編『戊辰戦争の史料学』所収、勉誠出版、2013 年
福岡万里子「幕末の日蘭関係と諸外国－仲介国としてのオランダ－」松方冬子編『日蘭関係史をよみとく－上巻　つなぐ人々』所収、pp.52-87、臨川書店、2015 年

福岡万里子「プロイセン東アジア遠征と日本・中国―近世近代転換期の日中外交比較の試み」塩出浩之編『公論と交際の東アジア近代』所収、東京大学出版会、2016 年
福岡万里子「ドイツ公使から見た戊辰戦争―蝦夷地と内戦の行方をめぐるブラントの思惑」保谷徹・箱石大・奈倉哲三編『戊辰戦争（上）－政治・世界（仮)』所収、pp.61-81、吉川弘文館、2018 年
保谷徹編『「19 世紀列強の陸・海軍文書を中心とした在外日本関係史料の調査研究」研究報告書』（科学研究費補助金基盤研究(B)-(2)研究成果報告書）2001 年
松井洋子「シーボルトに関する資料」『歴史と地理』第 700 号「日本史の研究」255 号、山川出版社、2016 年
松方冬子「一八四四年年オランダ国王ウィレム二世の「開国勧告」の真意」同著『オランダ風説書と近世日本』所収、東京大学出版会、2007 年
丸山國雄『初期日獨通交小史』日獨文化協會、1931 年
丸山國雄編『日獨交通資料第五輯―日獨條約の締結と其の意義』日獨文化協會、1940 年
三谷博『ペリー来航』吉川弘文館、2003 年
宮坂正英「シーボルトとペリーのアメリカ日本遠征艦隊－ブランデンシュタイン家文書を中心に」箭内健次・宮崎道夫編『シーボルトと日本の開国 近代化』所収、続群書類従完成会、1997 年
保田孝一『文久元年の対露外交とシーボルト』岡山吉備洋学研究会、1995 年
保田孝一「ロシアの日本開国交渉とシーボルト」箭内健次・宮崎道夫編『シーボルトと日本の開国 近代化』所収、続群書類従完成会、1997 年
横浜開港資料館編『ブレンワルドの幕末・明治ニッポン日記』日経 BP 社、2015 年
横浜市ふるさと歴史財団・ブレンワルド日記研究会編『スイス使節団が見た幕末の日本―ブレンワルド日記 1862-1867』勉誠出版、2020 年
横浜市編『横浜市史』第 2 巻、横浜市、1959 年